

近代江西省における手工製紙業の展開

著者	周 如軍
雑誌名	日本海域研究
巻	40
ページ	77-90
発行年	2009-03-10
URL	http://hdl.handle.net/2297/16920

近代江西省における手工製紙業の展開

周 如軍¹

2008年9月12日受付, Received 12 September 2008
2008年11月25日受理, Accepted 25 November 2008

The Development of the Hand-made Paper Industry in Modern Jiangxi Province

Ru Jun ZHOU¹

I. はじめに

中華民国期（1912～49年）初期には江西省における土紙（手工製紙）の生産は、中国の中で首位を占めていたが、1930年代になると、その首位の座を浙江省に譲った⁽¹⁾。

『江西経済史』（2004年）によれば、中華民国期には江西省の半数以上の県で土紙が生産されており、そのうち、最も生産量が多かったのは万載県や宜春県であり、また、最も有名だったのは泰和県の毛辺紙や鉛山県の連史紙などであると言われている。そして、1922～24年には江西省で生産された土紙の約6割が省外に移出され、その販売額は約400万円で、そのうちの84%が上海に移出されていたが、一方で、1920年代になると、新しい印刷工業が発達して土紙はその需要に応じ切れなくなり、外国製紙（洋紙）とりわり日本紙の輸入に供給を仰がざるを得なくなり、外国製紙の輸入額は毎年100万元以上に達し、しかも、年々上昇し⁽²⁾、1930年代には江西省への洋紙の輸入はさらに増加し、1931年は1923年に比べて30%余り増加していた。このために、江西省の土紙業は重大な打撃を受け、土紙が省外にはほとんど移出されなくなり、江西省内でも市場を確保するのが難しくなったという⁽³⁾。

以上の説明は、近代に洋紙の流入によって土紙が駆逐されたという見方に立っているが、1920年代以降に大量に流入したとされる洋紙は、土紙によって

は手当することができない近代的な印刷工業の原料であり、近代になって新たに生じた需要を充たしていた。また、1927～37年は第1次国共内戦期で、主要な土紙の生産地だった江西省の山間部を中心にして中国共産党と中国国民党が激しい軍事衝突を展開した時期だった。しかも、1929年に始まった世界経済恐慌が1931年には中国にも波及し、とりわけ農村経済に大きな打撃を与えた。こうした事情から、1930年代には江西省における土紙の生産が打撃を受け、その出回り量も減少したと考えられる。ただし、近代江西省における土紙生産の動向を知ることができる資料・統計が極めて乏しいせいであろうか、近代江西省の土紙業について本格的に論じた研究は全く見あたらない。いずれにしろ、近代江西省の土紙業の動向についてはもう少し詳細な事情をさぐる必要がある。

よって、本稿では、まず海関貿易統計資料を利用して江西省から移出された紙の量・額を把握することによって、中華民国期江西省における製紙業のやや長期的な動向をさぐり、次に江西省内の各地域ごとにおける土紙の生産動向を明らかにしたい。

なお、本稿では、煩雑さを避けるために、資料・史料などからの引用部分も含めて原則として常用漢字と算用数字を用いた。

¹金沢大学外国語教育研究センター 〒920-1192 石川県金沢市角間町 (Foreign Language Institute, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192 Japan)

II. 土紙の移出動向

九江海関は江西省における唯一の海関（税関）であるが、江西省で生産された紙の量は、九江海関を通過して江西省外に移出された紙以外にも、江西省内で消費された紙、九江海関を通過せずに省外に移出された紙、紙製品として加工された紙があったと考えられることから、江西省で生産された紙の量が九江海関を通過した量を上回っていたことは確実である。ただし、江西省内における紙の生産量を示す統計資料は必ずしも十分にはそろっていない。そこで、海関貿易統計資料によって土紙生産の動向を類推し、あるいは、その傾向を探ることにしたい。

移出された紙は、統計上で上等紙（一等紙）、次等紙（二等紙）、下等紙、紙箔（錫箔）、廠製紙（工場製紙）、その他の紙に分類されており、廠製紙以外は

全て土紙（手工製紙）である。そこで、以下において、九江海関から移出された紙の合計数量及びそのうちの主要な部分を占めていた上等紙と次等紙・下等紙の数量を見てみたい。また、時期は中華民国前期の基本的に平時に当たる1912～37年としたい。

1912～37年において九江海関から移出された紙は、移出量では1920年代前半の1922年がピークだったが、移出額では1920年代中頃の1926年がピークで、また、1912～30年の移出量は15万担前後で推移していたが、移出額では1,000万両余りだった1910年代よりも1920年代には2,000万両余りへとほぼ倍増していた。だが、江西省からの土紙の移出が1931年からは量・額ともに半分近くにまで激減し、その後も減少し続けたが、とりわけ1933年と1936年の落ち込みが非常に激しかった（表1-1）。

中国全国の1912～37年における上等紙・次等紙・

表1-1 江西省九江海関における紙の移出動向。

（単位：担，海関両）

年度	移出量	移出額
1912	153,827 (153,827)	1,293,762 (1,293,762)
1913	141,899 (141,890)	1,173,593 (1,173,440)
1914	140,342 (140,145)	1,143,163 (1,139,816)
1915	115,497 (114,232)	1,429,259 (1,407,831)
1916	118,019 (117,559)	1,242,134 (1,234,323)
1917	96,268 (91,959)	1,253,828 (1,220,954)
1918	147,254 (121,611)	1,740,134 (1,631,357)
1919	149,613 (125,485)	1,809,279 (1,697,433)
1920	169,324 (136,674)	2,026,088 (1,863,025)
1921	148,452 (130,913)	1,970,479 (1,878,833)
1922	184,153 (157,318)	2,268,438 (2,141,050)
1923	155,455 (154,806)	2,040,459 (2,029,418)
1924	140,833 (140,075)	2,178,048 (2,165,179)
1925	164,529 (164,149)	2,409,787 (2,401,913)
1926	157,338 (157,266)	2,520,805 (2,518,696)
1927	144,396 (144,396)	2,075,096 (2,074,730)
1928	121,195 (121,195)	1,999,178 (1,997,853)
1929	147,753 (147,753)	2,089,761 (2,089,761)
1930	157,488 (157,488)	2,185,036 (2,185,028)
1931	83,243 (83,223)	1,170,546 (1,170,385)
1932	97,167 (97,151)	1,203,037 (1,202,713)
1933	39,775 (39,775)	636,427 (636,128)
1934	29,463 (29,463)	613,129 (611,950)
1935	24,414 (24,412)	519,081 (517,069)
1936	4,379 (4,379)	81,868 (81,628)
1937	2,815 (2,815)	60,118 (59,234)

典拠) 中国第二歴史档案馆・中国海関総署辦公庁『中国旧海関史料(1859-1948)』(京華出版社, 2001年)より作成。移出額の単位は1933年から元となっており、1海関両は約1.55元である。カッコ内は上等紙・次等紙・下等紙の合計で、下等紙は1923年から統計資料に現れる。

表1-2 中国における上等紙・次等紙・下等紙の移出量。

（単位：担）

年度	上等紙	次等紙	下等紙	合計
1912	133,026	454,615		587,641
1913	140,974	411,264		552,238
1914	114,045	366,269		480,314
1915	117,081	364,603		481,684
1916	123,241	380,430		503,671
1917	122,698	303,599		426,297
1918	126,168	282,986		409,154
1919	150,206	357,233		507,439
1920	155,897	381,804		537,701
1921	165,368	369,400		534,768
1922	159,777	356,548		516,325
1923	207,876	350,462	212,000	770,338
1924	185,165	321,380	194,162	700,707
1925	181,975	380,215	207,957	770,147
1926	195,552	367,936	372,690	936,178
1927	180,221	364,809	306,796	851,826
1928	168,520	330,262	316,755	815,537
1929	134,667	324,753	272,402	731,822
1930	134,740	316,650	374,509	825,899
1931	178,216	284,587	372,255	835,058
1932	145,330	314,247	294,842	754,419
1933	112,991	361,077	190,783	664,851
1934	97,517	166,335	88,132	351,984
1935	82,482	158,330	109,968	350,780
1936	69,543	187,306	101,723	358,572
1937	53,191	135,653	72,645	261,489

典拠) 表1-1に同じ。

下等紙の移出量の合計は、1912～22年が60万担以下にとどまっていたが、1923～32年は70万担以上に増加し、1926年がピークで、93万担余りに達したが、1932年から減少し、1934年からほぼ半減している。中国からの紙の移出量のうち、次等紙が最も多く、これに下等紙さらに上等紙がついでいたが、1926～32年には下等紙は上等紙次等紙とほぼ同程度となり、1926年・1930年・1931年には下等紙が次等紙を上回っていた。上等紙の移出量は1920年代前半の1923年にピークをむかえ、1932年から減少している。また、次等紙の移出量は1912年が最高で、1918年を除いて1933年まで30万担を超えていたが、1934年から半減している。さらに、下等紙の移出量は1930年にピークをむかえて、1932年から大幅に減少している（表1-2）。

これに対して、1912～37年において九江海関から移出された上等紙・次等紙・下等紙は、量では1925年がピークで、額では1926年がピークであり、量・額ともに1931年に半減してから激減していった。そのうち、量・額ともに最も多かったのは次等紙で、

これに上等紙と下等紙がついでいた。1926～31年には下等紙の移出量が上等紙のそれを上回っていた。九江海関からの上等紙の移出量と移出額はむしろ1920年代後半の1929年と1926年にピークを迎えており、1931年にはほぼ半減してから、その後も激減し続けている。また、次等紙の移出量は1925年にピークをむかえ、その移出額は1922年がピークだった。さらに、1923年から統計上に現れてくる下等紙の移出量は1927年がピークだったのに対して、その移出額は1929年がピークだった。そして、次等紙・下等紙ともに1931年から激減している（表1-3）。江西省九江海関からの紙の移出の激減は、全国の動向と比べると、1～2年ほど早く始まっており、しかも、その減少幅も非常に大きくなっている。

さて、1912～23年における九江海関への紙の移入は、量では1923年を除くと7,000担以下で、額では3万海関両余りから10万海関両以下で（表1-4）、同時期における九江海関からの紙の移出に比べると（表1-1）、量・額ともに圧倒的に少なかったと言える。

そして、たしかに1924年から九江海関への紙の移

表1-3 九江海関における上等紙・次等紙・下等紙の移出動向。（単位：担，海関両）

年度	上等紙		次等紙		下等紙		合計	
	移出量	移出額	移出量	移出額	移出量	移出額	移出量	移出額
1912	15,268	340,476	138,559	953,286			153,827	1,293,762
1913	12,791	285,239	129,099	888,201			141,890	1,173,440
1914	11,389	253,975	128,756	885,841			140,145	1,139,816
1915	12,735	490,298	101,497	917,533			114,232	1,407,831
1916	14,098	466,644	103,461	767,679			117,559	1,234,323
1917	13,149	423,397	78,810	797,557			91,959	1,220,954
1918	16,322	452,120	105,289	1,179,237			121,611	1,631,357
1919	17,697	490,208	107,788	1,207,225			125,485	1,697,433
1920	20,138	557,822	116,536	1,305,203			136,674	1,863,025
1921	25,012	692,832	105,901	1,186,001			130,913	1,878,833
1922	22,975	636,408	134,343	1,504,642			157,318	2,141,050
1923	24,935	714,886	107,066	1,199,139	22,805	115,393	154,806	2,029,418
1924	23,962	718,860	95,508	1,337,112	20,605	109,207	140,075	2,165,179
1925	27,807	795,280	109,840	1,460,872	26,502	145,761	164,149	2,401,913
1926	25,809	826,404	92,716	1,448,224	38,741	244,068	157,266	2,518,696
1927	20,765	622,950	82,055	1,185,694	41,576	266,086	144,396	2,074,730
1928	20,115	704,025	74,801	1,103,305	26,279	190,523	121,195	1,997,853
1929	29,488	751,944	81,969	1,065,597	36,296	272,220	147,753	2,089,761
1930	26,801	683,426	94,809	1,232,517	35,878	269,085	157,488	2,185,028
1931	13,982	356,541	53,552	696,176	15,689	117,668	83,223	1,170,385
1932	10,804	230,134	75,578	901,230	10,769	71,349	97,151	1,202,713
1933	4,125	105,200	32,766	508,563	2,884	22,365	39,775	636,128
1934	1,884	59,201	26,371	540,234	1,208	12,515	29,463	611,950
1935	2,354	78,269	11,029	219,400	532	5,317	13,915	302,986
1936	468	15,469	2,828	54,621	1,083	11,538	4,379	81,628
1937	402	13,160	2,165	43,373	248	2,701	2,815	59,234

典拠）表1-1に同じ。

入は量・額ともに急増し、移入量は1929年にピークをむかえ、移入額は1931年にピークをむかえたものの、それでも依然として同時期における九江海関からの紙の移出より少なく、しかも1932年からはほぼ途絶したと言ってよいほどまでに激減している。しかも、移入された紙の主要なものは普通印刷紙と油光紙（羊毛辺）であり、土紙によっては代替することが難しい近代印刷業にとって適合的な紙だった（表1-5）。

以上のように、1912～37年の貿易統計を見ると、江西省九江海関からの土紙の移出は洋紙の移入を大幅に上回っていた。また、移出は1931年から減少していったが、移入は1932年からほぼ途絶えていったことから、1932年以降における土紙の移出の減少が洋紙の流入によるものではないことがわかる。よっ

表1-4 九江海関における紙の移入動向：1912～23年。

年度	移入量(担)	移入額(海関両)
1912	4,812	31,613
1913	6,789	47,451
1914	6,496	37,752
1915	6,891	42,881
1916	3,584	42,843
1917	4,388	57,385
1918	4,571	59,667
1919	1,007?	54,274
1920	5,567	79,148
1921	5,388	95,559
1922	6,757	324,104?
1923	7,380	69,963

典拠) 表1-1に同じ。なお、1919年の移入量と1922年の移入額は誤りであろうと思われる。

て、全体として見ると、1912～37年における江西省への洋紙の流入が土紙を駆逐していったというよりは、土紙によっては代替することが難しい品質の紙の移入が拡大していったと言うことができる。そして、以上のこのことから、少なくとも1912年から1920年代中頃までは江西省の土紙の生産は拡大する傾向にあり、その後もほぼ維持していたであろうと類推することができる。

Ⅲ. 土紙生産の動向

前述したように、近代江西省における土紙の生産動向に関する資料及び統計数字は必ずしも整っていないが、ここでは可能な限り、中華民国期の1912～49年における江西省土紙生産の動向をさぐってみたい。以下、さしあたり政治史による時期区分に従って、1912～27年(南京臨時政府時期・北京政府時期)、1927～37年(南京国民政府時期)、1937～49年(日中戦争時期・第二次国共内戦時期)の3期に分けて見てみたい。

1) 1912～27年

1912～18年には、江西省において土紙の生産戸数・生産者数・生産額がともに漸増する傾向にあり、土紙の生産戸数は7,000戸近くに達して、全国の10%余りから20%余りを占め(ただし、20%余りとなった1916年からは全国の統計数値に不備があった)、その生産額では1916年には全国の30%余りを占めていた。また、他の土紙の生産地と比べると、江西省では土紙生産者のうち男子の占める割合が非常に高

表1-5 九江海関における紙の移入動向：1924～37年。(単位：担，海関両)

年度	合 計		普通印刷紙		油光紙(羊毛辺)		その他	
	移入量	移入額	量	額	量	額	量	額
1924	9,666	136,350	3,026	27,233	6,126	56,196	514	52,921
1925	15,134	154,632	3,827	31,057	8,792	73,779	2,515	49,796
1926	15,489	175,182	3,137	25,488	8,715	77,413	3,637	72,281
1927	15,534	197,187	3,064	29,332	9,360	124,653	3,110	43,202
1928	20,179	209,080	5,317	42,860	10,291	96,857	4,571	69,363
1929	23,955	256,095	7,128	56,093	10,861	96,220	5,966	103,782
1930	14,401	176,138	4,643	42,538	5,905	66,641	3,853	66,959
1931	22,927	359,751	5,273	62,495	11,328	172,897	6,326	124,359
1932	30	702	5	48	22	234	3	420
1933	32	739	9	83	—	—	23	656
1934	109	396	8	96	—	—	101	300
1935	245	82	—	—	—	—	245	82
1936	—	11	—	—	—	—	—	11
1937	—	4	—	—	—	—	—	4

典拠) 表1-1に同じ。1924年から品目が細かく分類されるようになった。

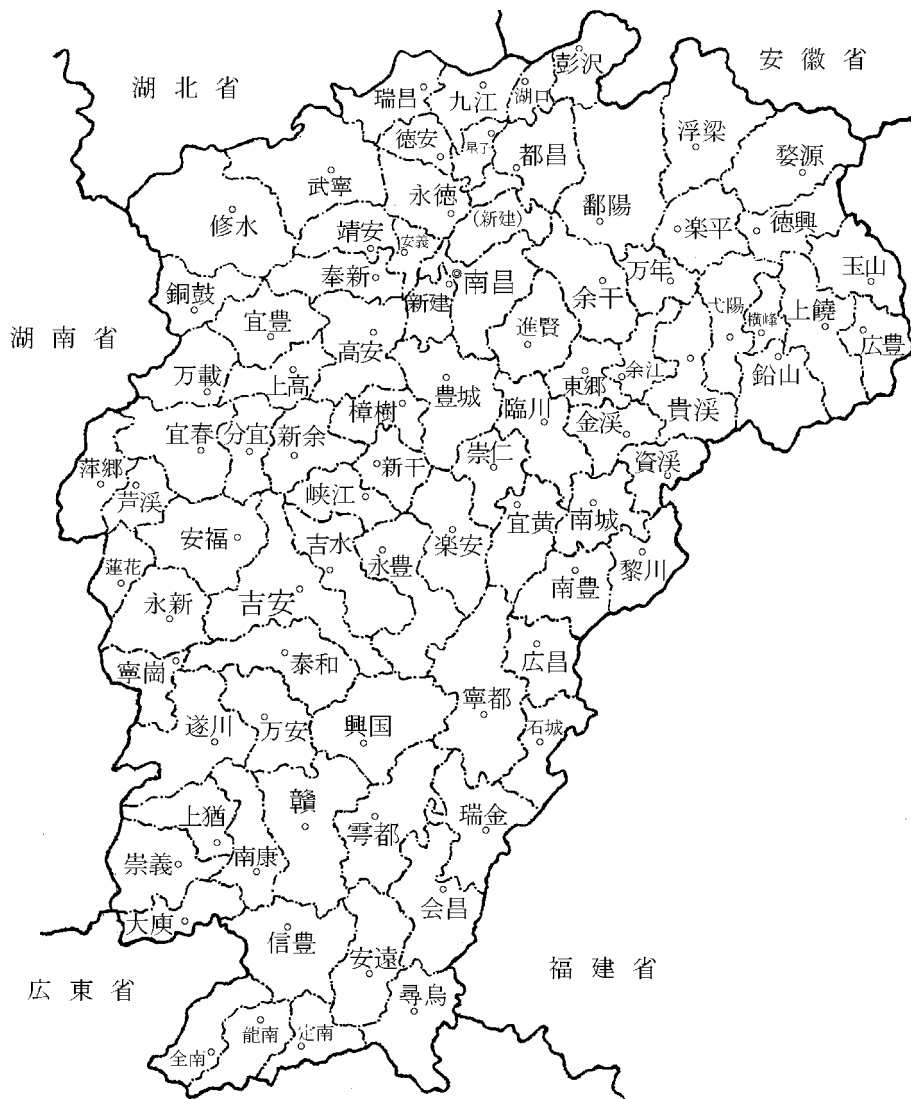


図1 江西省の地図。

かった（表2-1）。このことは、江西省では多くの農家の家計の中において、土紙の生産が副業というよりはむしろ主業の位置を占めていたことを表していると考えられる。

1913～18年は1912年の2倍以上の土紙が生産され（表2-1）、粗製紙の生産額が最も多く、これに「その他」の紙を除くと、毛辺紙・白関紙・表芯紙や連史紙・皮紙などがついでいた（表2-2）。

1918年に刊行された報告書によれば、「江西の一特産たる」土「紙の原料としては往昔は樹皮を用ゐたりしも、後世古布及古綱を用ゆること行はれたり、而して近世に於ては更に進歩し、専ら竹を以て製紙原料に供するに至れり」という。そして、土紙の生産地は「万載、宜春二県下を第一とし、表紙、表芯と称する紙を出す、其の額60万両内外に達し、多く

包装用として使用せらる、省外移出は概ね此の地方の産と」され、「吉安方面に於ける産紙は其の年額14万両内外にして、多く龍泉、万安、泰和の3県地方より出づ、等しく包装用として使用せらる、永豊県下には毛辺紙の産あり、専ら書籍用として使用せらる、然れども其の産額多からず、僅かに附近の需用を充すに過ぎず」、また、「河口鎮に集散する紙は約40万両内外にして、主として鉛山県城以南に産し、紫溪最も名あり」とされ、さらに、「吉安、安福には書紙を出し、万安、泰和には大表賽紙を出し、袁州万載には表芯紙を出し、河口には運泗紙を出すと云ふ、而して泰和の毛辺紙最も有名なり、袁州紙は長江一帯に出され年産額300万元に上る」と言われていた⁽⁴⁾。

また、江西省では中華民国初期に土紙を主要な材料とする扇子製造業（製扇業）や花火・爆竹製造業

表2-1 江西省における土紙の生産動向（1912～21年）.

年度	製造戸数		従業者数			生産総額（元）	
	全 国	江西省（%）	男	女	合計	全 国	江西省（%）
1912	4,771	6,152 (13.7)	24,605	1,063	25,668	27,964,514	3,301,908 (11.8)
1913	55,181	6,631 (12.0)	26,150	1,606	27,756	38,112,987	7,338,240 (19.2)
1914	42,076	6,615 (15.7)	26,121	1,607	27,728	46,744,167	7,365,237 (15.7)
1915	55,868	6,702 (11.9)	26,566	1,600	28,166	45,235,776	7,365,626 (16.2)
1916	29,620	6,711 (22.6)	26,573	1,618	28,191	23,251,635	7,315,427 (31.4)
1917	32,923	6,918 (21.0)	27,320	1,930	29,250	27,477,521	8,012,235 (29.1)
1918	30,614	6,919 (22.6)	27,321	1,930	29,251	32,551,696	8,116,163 (24.9)
1919	20,982	—	—	—	—	20,844,775	—
1920	5,837	—	—	—	—	11,154,284	—
1921	4,168	—	—	—	—	6,692,062	—

典拠) 農商部総務庁統計科編纂『中華民国元年・第一次農商統計表』上巻（上海中華書局、1914年3月）120～124頁・『中華民国2年・第二次農商統計表』（1915年6月）139～143頁・『中華民国3年・第三次農商統計表』（1916年12月）239～242頁・『中華民国4年・第四次農商統計表』（1917年12月）447～449頁・『中華民国5年・第五次農商統計表』（1919年2月）364～365頁・『中華民国6年・第六次農商統計表』（1920年8月）364～367頁・『中華民国7年・第七次農商統計表』（1922年2月）364～367頁・『中華民国8年・第八次農商統計表』（1923年5月）328～329頁・『中華民国9年・第九次農商統計表 附十次農商統計表』（1924年6月）324～325頁より作成。なお、1916年以降は統計数値を収集できない省が生じ、1919年からは江西省の統計数値が欠落し、1921年には河南・山西・江蘇・安徽・陝西・察哈爾の6省の統計数値のみが記載されている。なお、表中の「—」は統計上に記載がないことを示している。

表2-2 1912～18年の江西省における土紙の種類別生産動向。（単位：担，元）

年度		連史紙	毛辺紙	画心紙	皮紙	白関紙	油紙	模倣西洋紙	表芯紙	粗製紙	その他
1912	量	20,500	55,386	600	5,810	20,371	1,034	150	—	543,278	—
	額	60,419	274,332	24	104,020	207,415	11,077	9	—	1,476,945	1,167,667
1913	量	50,790	148,975	750	9,687	38,416	1,408	14,500	—	1,874,600	—
	額	152,370	759,747	30	164,679	384,380	15,066	37,240	—	4,846,500	978,228
1914	額	149,748	753,890	57	165,004	376,872	14,365	48,519	—	3,539,570	2,317,212
1915	額	121,770	775,939	84	131,675	374,125	14,036	55,508	—	3,549,900	2,342,589
1916	額	123,040	772,652	179	136,987	343,340	15,340	56,640	—	3,460,684	2,406,564
1917	額	178,432	870,993	0	125,278	309,721	12,997	42,489	421,169	3,793,932	2,257,224
1918	額	175,452	870,992	0	125,279	309,725	12,996	42,478	421,078	3,799,940	2,355,223

典拠) 表2-1に同じ。なお、1918年に3,187元の宣紙が生産されていた。

（花炮業）の手工業が発展していた。そのうち、製扇業は江西省西南部の遂川県が最も盛んで、1917年の九江海関からの移出量だけでも200万把に達し、また、花炮業は江西省北部の万載県が最も著名で、同県内の株萍鎮だけでも数百カ所の作業場があり、1918～19年には1.4万箱余りの花火が生産され、中国東南部の各省や朝鮮に販売された⁵⁾。

2) 1927～37年

1930年の調査によれば、江西省の毛辺紙・連史紙はともに上質な竹紙として有名だった。このうち、毛辺紙は賬簿、文牘、習字、包装に用いられ、その生産地としては石城県横和が有名だった。また、連史紙は碑帖、印刷、信箋、書画、扇料、包装に用いられ、その生産地としては鉛山県陳坊が有名だった。

その他に、江西省で生産された土紙には火紙、廁紙として用いられた表芯や蓬紙（ただし、上等紙の用途は信箋）があり、蓬紙の生産地としては贛州（1刀は77枚、1梱は50刀、1担は4梱）が有名だった⁶⁾。

粵湘鄂贛特産聯展會江西籌委會編印『江西之特産』（1937年）によれば、江西省は旧式の土紙業が最も盛んな地域で、その土紙の品質も全国の中で最も優れていた。江西省全83県のうち、半数以上の県で土紙が生産され、鉛山県と万載県が最も盛んで、鉛山県の連史紙・関山紙と泰和県の毛辺紙が最も著名だった。それらの土紙は、国内ばかりでなく、日本や東南アジアにも多く販売されたという⁷⁾。

江西省産土紙の移出が激減していった前年の1930年における江西省各県の土紙生産動向を示す資料がある（表2-3）。これによれば、1930年における土紙

表2-3 1930年における江西省各県の土紙生産動向.

県名	種類	生産量	移出先	販売額 (元)
靖安	把紙	10万皮	呉城	4,500
豊城	金紙	20万帖	隣県	120,000
	粗紙	5万斤	豊城県	3,500
	小計			123,500
鉛山	京放紙	7.5万件	呉城・上海・南京等	195,000
	連史紙	4.2万件	上海・天津・漢口等	336,000
	小計			531,000
宜黄	草紙	30万塊	湖北	210,000
吉水	焼紙	約230万把	吉水県・隣県	230,000
上饒	花火紙	約14万塊	江西省各地・呉城・漢口	720,000
萬載	表芯紙	約4万担	江西省各地・呉城・漢口	280,000
定南	福紙	約1千担	定南県・広東・見嶺和平	24,000
	西紙	約3千担	同上	24,000
	唐紙	約1千帖	同上	1,200
	小計			49,200
贛県	紙	約500担	贛県・外県	
安義	唐紙	数万担	南昌・呉城・涂家埠	
宜春	大簾紙	数万担	宜春・南昌・九江	
崇義	紙	約数万担	江西省・外省	
雩都	都紙	約5千担	雩都・隣接地	10,000
瑞金	紙	約13.3万帖	瑞金・呉城・長沙	266,000
安福	草紙	約3千担	吉安	24,000
崇仁	白紙	約500担	吉安	10,000
	唐紙	約20万帖	崇仁・南昌・臨川	200,000
	小計			210,000
泰和	大表紙	約2万担	揚子江一帯	70,000
宜豊	花箋紙	600余万塊	山東・河南・揚子江一帯	420,000
	把紙	約20万皮	江西・湖北・湖南・安徽	520,000
	広慧白紙	約3百担	隣県各地	5,000
	小計			945,000
樂安	花坯紙	約1.3万担	揚子江一帯	208,000
永豊	唐紙	約5千担	吉安・南昌	80,000
金谿	粗紙	約2万把	貴溪・余江・資溪	6,000

典拠) 中支建設資料整備委員会(上海・興亜院華中連絡部内)『江西経済事情』編訳彙報第59編(1941年3月)11~13頁より作成。原典は、江西省政府経済委員会『江西経済問題』江西省政府経済委員会彙刊第1集(1934年)であり、その数字は1930年の各県産紙額調査によるという。ただし、統計に上っているのは主要な21県にとどまり、しかも、その21県のうち、贛県・安義・宜春・崇義の4県の販売額は不明となっている。

の販売額では、宜豊県が最も多く、これに省東部の上饒県・鉛山県や省西部の万載県などがついてきた。そして、この同じ資料には、この時期における江西省の土紙生産について、次のように記されている。「江西省産紙区の大半は匪禍を蒙り、その産額激減し、「販路に就いて述べるならば、外国紙の圧迫を享けて現存の製紙業は危機に瀕して」おり、また、「江西省産紙」は華北を「主要販路とし」、「揚子江下流

域がこれに次ぎ、揚子江上流の湖南・湖北両省一帯にも亦多少の販路を有し」ていたが、「外国向の輸出は洵に微々たるもので、これによつても江西省紙は完全に国内市場を以て主要販路としてゐることを窺ふ」ことができるとされ、「日本紙」が華北を「主要ダンピング地となし」たために、「江西省紙市場の縮小」をもたらしたという。だが、1932年には日本が中国の「東北を占領したことによって、全国的に日

表3 江西省各県における土紙の生産額（1934～36年の平均）.

（単位：千元）

県名	上等印繕紙	較次印繕紙	包装日用紙	製造品原料紙	迷信紙	合計	順位	%
銅鼓	—	38	228	—	—	266	⑨	4.74
奉新	—	—	—	—	923	923	①	16.45
靖安	2	2	165	—	—	169	⑭	3.01
萍鄉	—	43	145	227	26	441	②	7.86
宜春	5	—	161	—	25	191	⑪	3.40
万載	—	—	168	—	168	336	⑤	5.99
宜豊	—	—	277	—	—	277	⑥	4.94
高安	—	—	11	—	—	11		0.20
吉水	—	—	—	—	4	4		0.07
万安	—	—	67	—	34	101		1.80
永豊	—	19	—	—	—	19		0.33
遂川	—	—	55	—	—	55		0.98
安福	176	—	—	—	—	176	⑫	3.14
上猶	—	129	8	10	—	147	⑭	2.62
崇義	—	206	4	49	17	276	⑧	4.92
大庾	—	138	—	16	16	170	⑬	3.03
信豊	—	—	5	5	—	10		0.18
虔南	16	—	—	—	—	16		0.29
龍南	—	8	28	—	8	44		0.78
定南	—	—	—	—	83	83		1.48
尋鄔	—	—	4	—	—	4		0.07
安遠	1	—	—	—	—	1		0.02
婺源	—	—	—	2	8	10		0.18
徳安	—	—	—	5	—	5		0.09
上饒	—	—	25	—	252	277	⑥	4.94
広豊	—	—	11	—	11	22		0.39
玉山	—	—	9	3	9	21		0.37
鉛山	179	—	73	21	89	362	③	6.45
戈陽	—	—	—	—	134	134		2.39
貴溪	—	—	—	—	147	147	⑭	2.62
万年	—	—	—	—	1	1		0.02
南城	—	18	16	—	21	55		0.98
南豊	—	—	—	—	1	1		0.02
宜黄	—	11	—	—	29	40		0.71
樂安	—	6	—	—	—	6		0.11
崇仁	—	175	—	—	44	219	⑩	3.90
資溪	—	—	11	—	52	63		1.12
光沢	116	—	6	—	4	126	⑯	2.25
黎川	—	22	—	—	—	22		0.39
寧都	—	29	—	—	—	29		0.52
石城	—	350	—	—	—	350	④	6.24
瑞金	17	19	2	—	—	38		0.68
雩都	—	22	12	—	29	63		1.12
興国	—	—	1	2	—	3		0.05
合計	508	1,135	1,493	507	1,967	5,610		100
%	9.06	20.23	26.61	9.04	35.06	100		

典拠) 江西省政府建設庁編印『紙』(1939年5月) 33～37頁より作成. ただし, 魏天驥の調査報告によるとしている.
 なお, 各県の占める割合(%)は, 小数点以下第3位を四捨五入した.

貨排斥の空気を醸成し、日本の対中国「貿易は俄然激減を招来し」、「日本紙の輸入減少によつて江西省紙の需要は増加し」、「江西省産粗紙は、その主要原料が粗竹と藁で、その質が荒くて厚いために、包装用または護摩焚用として、毎年他省に於いて消費せられるものは相当の額に上つたが、近年これも亦販路の縮小は細紙に比べて更に大である。その原因を考へると、(一)民間の迷信程度の漸減と同時に農村経済の破産によつて不必要なこの種の消費は当然先づ縮減或は根本的に断絶されたこと。(二)包装用紙は多く外国産の牛皮紙に取って替られたことに外ならない。」としている⁽⁸⁾。

江西省各県における土紙の生産額を1934～36年の平均から見ると、まず用途では、宗教儀式用の「迷信紙」が35.06%を占めて最も多く、包装・日用紙が26.61%を占めてこれについているが、「上等印繕紙」と「較次印繕紙」の印刷・書写用紙を合わせると29.92%となり、包装・日用紙よりも多くなっている。また、地域では、「迷信紙」のみを生産する奉新県が16.45%を占めて最も多く、萍郷県・鉛山県・石城県・万載県などが続いており、これら上位5県だけで約43%を占め、上位10県では66%余りを占めている(表3)。

このように、江西省における土紙の生産は地域的に極めて偏在していた。また、1930年(表2-3)と比べると、その激減ぶりにおどろかされるとともに、第一次国共内戦期の困窮・反囲剿戦の展開が土紙生産に大きな打撃を与えていたことがわかる。

3) 1937～45年

1937～45年の日中戦争期における江西省土紙業に関する資料は少ない上に、入手が困難な資料もある。とりわけ、1946～49年の第二次国共内戦期に関する資料は全く見つけることができなかった。

1939年に刊行された文献によれば、近代に江西省において生産された土紙は200種類余りにも及び、上等印繕紙、較次印繕紙、包装・日用紙、各種製造品の原料紙、迷信(宗教儀式)用紙の5つに分類されている。このうち、上等印繕紙は上等の印刷・書写用紙で、河口県の連紙(連史紙)が代表的なもので、その他に靖安県の白貢川、宜春県の漂貢、虔南県の京文、安遠県の大連、鉛山県の官山・関山、瑞金県の玉版、光沢県の大疋などがあつた。較次印繕紙は上等印繕紙よりも品質が劣る印刷・書写用紙で、石城県の横江の毛辺(毛辺紙)が代表的なものだった。ただし、横江の毛辺はさらに横江毛辺と横江重紙に2分され、旧式の帳簿・書写に用いられた。その他に、

靖安県・瑞金県の花胚、萍郷県の湘表、上猶県・大庾県の山貝・高方、崇義県の磨頭、龍南県の求紙、宜黄県の官堆、資溪県の京丹、零都県の都紙、興国県の大西などがあつた。包装・日用紙は質が劣り、万載県の表芯が代表的なもので、その他に網鼓の浙表・尺表、靖安県の把紙、萍郷県の二夾・表申・宣表、宜春県の大簾、宜豊県の花箋・加表・小表、万安県の草紙・琢表・次表、龍南県の磨頭、尋鄔県の岑峯、上饒県の黄尖、各地の花尖、鉛山の宜黄、瑞金県の重紙・煙紙、零都の尖紙・峯山などがあつた。各種の製造品の原料紙は爆竹・灯籠・雨傘・靴底などを作るための紙であり、萍郷県の点張・皮紙・爆料、上猶県の紗棉、崇義県の高方、信豊県の寸張、婺源県の京放・中放・傘皮、徳安県の靴底、鉛山県の京放・捲筒、資溪県の京丹、興国県・玉山県の棉紙などがあつた。迷信用紙は宗教儀式を行う際に焼くためのものであり、奉新県の火紙の生産量が最も多く、その他に、萍郷県の黄乾、宜春県の高紙、吉水県・婺源県の焼紙、万安県の皂紙・小紙、上猶県の焼錢、龍南県の求紙、定南県の福紙、婺源県の引皮・毛長、各地の黄表、弋陽県の白表、南城県の連七・斗方・長方、各地の草紙、宜黄県の廠紙、資溪県の黄中則、零都県の花尖・秤紙などがあつた⁽⁹⁾。

IV. 各県の状況

1) 東部

浙贛鉄道沿線の玉山から南昌までの地域において土紙の生産量が多かったのは、上饒・貴溪・鉛山・広豊の各県で、そのうち鉛山県の土紙は品質が良く、表芯・火紙・草紙を主とする粗紙と毛辺・連史・白関・関山・貢川を主とする細紙に大別されていた。それらの土紙は、上海・杭州・青島・天津・漢口などに販売された⁽¹⁰⁾。

鉛山県の連史紙は1612年頃から生産され始めて、乾隆・嘉慶・道光年間(1736～1850年)に盛んになり、紙槽が2,000余りに達し、連史紙の年産量は20万担近くに達した。1840年のアヘン戦争後、洋紙が中国に流入して、土紙の販売が日増しに縮小し、鉛山県の土紙の生産・販売も同様に減少していった。ところが、紙槽は、中華民国元年(1912年)以降、洋紙の流入に抵抗し、日増しに変革する印刷出版技術や万年筆書きの需要に適応するために、土紙の連史紙に対して改良を加え、龍排連・改良連・海月連・大匹紙などのいくつかの新製品を生み出していった。そして、1914年に第一次世界大戦が爆発すると、洋紙の流入が減少し、逆に、鉛山県の連史紙を含む土

紙の生産・販売は旺盛となり、鉛山県の連史紙の生産量・生産額は1916年に4.2万件（2.1万担）・33.6万元にすぎなかったが、1918年には33.6万件（16.8万担）・260万元にまで激増したという⁽¹¹⁾。

このように、鉛山県では、アヘン戦争後、洋紙の流入によって土紙業が徐々に衰退していったが、中華民国初期にやや復活し、槽戸は4,000戸余りにまで増え、土紙生産者は2万人近くとなり、年間生産量は2万トンを超えた。また、魏天驥『江西手工製紙之現状及其改進』（1938年）によれば、1930年以前の年間移出額は300万元余りとなったという。あるいは、江西省建設庁編『江西建設匯刊』（1930年10月）によると、鉛山県の連史紙の生産量は4.2～5万件（1件は12刀、1刀は98枚）で、約400万元となり、おもに上海・杭州・天津・漢口などへ販売されたという。だが、その後、コストの上昇と紙価格の下落によって欠損が生じ、生産量は年々下降し、1937年に抗日戦争が勃発すると、販売不振となってほとんど生産が停止した。ところが、1940年以降、紙の価格が上昇し、連史紙の生産も徐々に回復した⁽¹³⁾。

ところで、鉛山県で生産されていた土紙の種類は非常に多かったが、陳坊の連史、湖坊の京放、石塘の改良紙・関山紙などが主要なものだった。このうち、陳坊の連史は、最盛期には年間60～70万元を生産していたが、1930年には30～40万元にすぎなくなり、石塘の関山紙に至っては第一次国共内戦により完全に生産が停止してしまっていた。鉛山県で生産された土紙は、全て河口鎮に集められて移出されたが、最盛期には年間300万元にも達していた土紙の移出は1930年代には100万元にも及ばなくなってしまった⁽¹⁴⁾。

さて、1918年に刊行された報告書によれば、「上饒県に於ける主要工業は製紙業」で、年間生産額は15～16万元とされており、「仕向地は上海、浙江、通州、北京方面なり、其の産地は南郷殊に鉄山、上爐、模坑地方及び北郷殊に陳家坊、十四都、十六都地方を主要の地と」していた⁽¹⁵⁾。そして、上饒県で生産される土紙には八一箋・八二箋・黄表の3種類があり、南部と北部の両地域で生産され、八一箋の多くは杭州へ販売され、八二箋は山東省・上海へ販売され、黄表は煙台や北平（北京）へ販売された。上饒県がソビエト区になる前には、年間12万塊（1塊は約27～28斤）の土紙を生産していたが、1934年には同県北部での生産は非常に少なくなり、同県南部での生産も約18万元・約8万塊となっていた⁽¹⁶⁾。

また、貴溪県において生産された土紙は、おもに箱表と夾板の2種類で、南部の塘湾・文坊一帯や冷水

坑が生産地となっており、山東・安徽・湖北・江西の各省に販売された。このうち、箱表は年間30万元余りを生産し、上海に販売され、さらに山東省などに転売され、一方、夾板はおもに湖北省に販売され、昔年は数十万塊（1塊は2斤余り）も生産していたが、1934年の販売量が、夾板紙は約10万塊、箱表紙が約16万塊となってしまった⁽¹⁷⁾。土紙の生産が盛んな文坊・詹源・棲南・嶺製などでは、1914年には土紙を生産する槽戸が800戸以上あったが、1936年には700戸ほどまでに減少した。また、生産される土紙の種類は京表・草紙・夾板紙・厚殻紙など非常に多かったが、文坊の京表が主要なもので、最盛期には年間生産額が50～60万元に達したが、1936年頃には30～40万元にまで減少していた⁽¹⁸⁾。

その他、おもに杉・楠・竹を生産していた広豊県では、1930～32年に同県の南東部を匪賊に占拠され、経済が破綻していった⁽¹⁹⁾。あるいは、地味が肥沃で、おもに米を生産していた万年県の第2区で作られた紙は、第5区石鎮街を通して移出されていたが、1926年から休業する店が現れ、何度か匪賊に強奪され、農民の購買力は衰えた⁽²⁰⁾。

2）西部

山勝ちで農地の少なかった万載県では、食糧が不足し、山地の多くの地域で住民が表芯紙を作っていたが、1930年代前半には山地に土匪が糾合したために表芯紙がほとんど生産できなくなった⁽²¹⁾。

万載県では、清朝光緒年間に年間約10万担余りの表芯紙が生産され、蕪湖・南京・上海などに販売され、清末には数十軒の紙商店のうち、2軒の大きな紙商店が各々毎年8万担余りと7万担余りの表芯紙を買付けていた。表芯紙の年間生産量は1921～26年には40万担余りだったが、その後、国民党の匪剿戦の影響を受けて、1937年には12万担余りとなり、抗日戦争が勃発した後はさらに減少した⁽²²⁾。

萍郷の芦溪では、清末から中華民国初期にかけて紙の価格が高騰したため、製紙業者の多くが豊かになり、とりわけ、麻田地区では、紙槽が200余りにまで増加し、2～3万担の提庄紙を生産していたという。そもそも、麻田には製紙にとって第二の重要な原料であった石灰の鉱山はなかったが、竹以外にも雪花皮・谷皮・棉皮やその他の製紙原料の生産も盛んだった。1912年には大江辺村の老庵里に皮紙工場が設立され、高い利益を上げて売れ行きも順調だった。その後、まもなくして皮紙工場は10カ所余りにまで増え、皮紙の年産量は100担近くになった⁽²³⁾。ところが、1928年秋、麻田地区は湘贛革命根拠地の重要な

拠点となり、製紙工業が中断したが、1931年春に萍郷県のソビエト政府が、逃亡した豪紳・地主の紙槽を没収して各郷の集団経営としたことによって、新たな繁栄の時期に入り、当時、製紙業に資産を投じた者の紙槽は50余りに達した。ただし、1934年冬から1935年春まで、麻田郷は多事多難な時期を迎え、製紙工業も不振となったというが⁽²⁴⁾、萍郷の芦溪の宣風の表芯紙は宣表紙と呼ばれ、清末から1935年までの間、「紙庄」の営業は非常に繁昌したという⁽²⁵⁾。

宜春県の土紙は、毛竹を基本的な原料とし、書写・衛生・包装などの用途に適しており、民国『宜春県志』によれば、「宣表」や「大帘」と呼ばれた土紙は宜春県西南部で生産され、江西省内及び長江下流域などに販売され、その生産額は20万元（銀元）に達したという。また、江西省建設庁の調査による1930年の統計によれば、宜春県では年間2万担の大帘紙と6,000担の表芯紙が生産され、総生産額が39.6万元だったが、その後、日本やアメリカなどから洋紙が輸入されると、土紙は打撃を受けたという⁽²⁶⁾。宜春県の土紙の販売額は1929～30年に100万元を超えていたが、1933年には約10万元となった⁽²⁷⁾。

銅鼓県では、清代に火紙・花箋紙・表芯紙・疏紙・穀皮紙・土棉紙・硬殻紙が生産され、1923年には白紙（毛辺）も生産されるようになった。1927年には全県に1,055戸の槽戸がいた。1931年、ソビエト区の生産合作社の下に製紙工場が作られ、おもに表芯紙と草紙が生産されて移出されると同時に、経済封鎖のために大部分の槽戸が生産を停止してしまい、ソビエト区では紙が不足するようになったので、古紙を原料とする「還魂紙」も生産された。抗日戦争が勃発すると、火紙や表芯紙の売れ行きが悪くなり、白紙の移入ができなくなり、紙の価格が上昇したので、多くの槽戸が白紙の生産へ転換した。こうして、白紙の生産は年々増加していった。また、1942年には県内に5つの紙張生産運銷合作社と3つの紙業生産合作社が設立された。そして、抗日戦争中は、表芯紙と火紙の生産が回復し、毛辺紙（白紙）の生産も依然として盛んだった⁽²⁸⁾。

1930年代中頃の報告によれば、奉新県第5区の上富では、土紙（乾古紙）を生産しており、呉城・九江などに販売された⁽²⁹⁾。なお、前掲の表3によれば、同じ1930年代中頃には奉新県の土紙生産は江西省の中で第1位だった。

安福県では、毛竹の生産が盛んだったために、土紙の生産も盛んで、とりわけ武功山区の白貢紙が有名だった。泰山の土紙には大貢紙・二貢紙・連史紙・毛辺紙・銭紙（草紙）などの種類があり、貢紙は主

に毛筆の書画用に用いられ、「土宣紙」と称賛された。一方、武功山には廟が多かったので、紙銭と呼ばれた草紙に対する需要が大きかった。1934年には安福県内の土紙生産額は18万銀元にも達した⁽³⁰⁾。

3) 北部

黎川県では、おもに毛辺が生産され、また、表芯・京放などの土紙も生産され、最盛期には年間8,000担（48万斤）の土紙が生産されたが、1930年代前半には「土匪」の擾乱によって年間3,000担（18万斤）にとどまった⁽³¹⁾。

宜黄県では、火紙・泉紙などの土紙が生産され、それらは斗方紙と呼ばれ、最盛期には年間100万元余りの土紙が生産されて、おもに湖北省の天門・石首・沙陽・老河口などに販売されていたが、1930年代には年間30万元余りの土紙が生産されるにすぎなくなった⁽³²⁾。

1918年に刊行された報告書によれば、九江県の土紙は竹紙の蓬紙と火紙の2種類があり、蓬紙は九江県「王每渡に多く産す、其の品質に由り更に4種に分つを得べし然れども其の大きさは殆ど同じく我が1尺5寸3,4分に1尺1寸8分内外なり、最上のは以て字を書するに堪ゆべく、其紙質も強し、最も悪しきものは其表面極めて粗にして弱く厚く、小売店に置ける商品の包装用に用ゐらるゝのみ」で、「此種の最下級に属するものは火紙（支那人の煙草を吸喫する際に用ゆる点火用のもの）に用ゐらる、而して蓬紙は年産額約四千余担あり、1担は4捆、1捆は50刀、1刀は27枚にして、1担の平均価格は3元5角なり、其の販路は饒州府景德鎮等に移出せらるゝもの、1年約700担、臨江府、豊城県に移出せらるゝもの、一、二千担、其他は県内に消費」し、一方、火紙の「質蓬紙の最も悪しきものと匹敵すべし、其大き一定せず、縦1尺余、横5,6尺及縦横各5,6寸のものあり、褐色を帯び焼銭を作る、産額三千余担にして、1担は108斤、1担の価格約2元とす、火紙は移出するもの少しと雖も、移出には例の如く竹籠に入れ、船に依りて積送せらる、1籠7,80斤、而して紙の計算に用ゆる担には大担小担の別あり、小担は100刀を以て1担となし、大担は200刀を以て1担と」していた⁽³³⁾。

4) 中部

南城県は、山勝ちな西南部で椎茸・竹・木材・土紙を生産し⁽³⁴⁾、また、険しい山の多かった崇仁県第6区でも、杉・竹・草紙を生産した⁽³⁵⁾。

南豊県は、草紙の生産が盛んで、交通も便利だった。米・夏布・草紙の生産が盛んだった宜黄県も、

ソビエト区の影響を受けてから、夏布・草紙が生産されなくなった⁽³⁶⁾。

宜豊県は、山地では竹・木材・便箋・表芯紙を生産していたが、1929年から匪賊に蹂躪されて農地が荒れ、被害が最も酷かった第2・3区は、手工製紙工場が破壊された⁽³⁷⁾。

樂安県は、山地が6割、農地が4割で、1928年から紅軍に騷擾され、1,500人余りの紙漉工が従事していた製紙業も破壊された⁽³⁸⁾。

なお、1930年代前半に江西省広豊から土紙生産労働者が浙江省湯溪へ移住して土紙を生産したという⁽³⁹⁾。このように、第1次国共内戦による混乱のため、土紙生産者が難を避けて隣接する省に移住していった例は外にもあったと考えられる。

5) 南部

1918年に刊行された報告書によれば、瑞金県の「代表的工業製品」だった土紙は、「2, 3家或は4, 5家集りて一廠を作るを普通とし、一廠に付職工多きは7, 8人、少きは4, 5人を使用」し、「毛辺と花尖とを間はず1日凡そ80担」を生産し、年産額6~7万元の「毛辺は竹幹の肉にて作りしものにして少し薄けれども質は稍良く、以て字を書くに堪」え、「多く官庁の揭示用紙に用」いられた。また、年産額が1~2万元の「花尖は甚だ厚く」、「一名を草紙と称し、竹の肉皮にて作り、其質甚だ粗なり、毎に火紙（支那人吃煙の際点火用に用ゆる紙撚の如きもの）を作るに用ゐ又壁紙にも用ゆ、此等の紙は先づ呉城に行き、それより漢口、南京方面に移出」されていた⁽⁴⁰⁾。

1918~47年、石城県ではおもに5か所で土紙が生産されていた。横江（珠璣、齊賢、小姑）には紙槽が103戸、従事者が727人おり、洋地（三坑、上墩、逕口、張坑、桃花磔）には紙槽が104戸、従事者が930人おり、小松（塘塍岭）には紙槽が13戸、従事者が117人おり、大曲（蓮花山）には紙槽が3戸、従事者が27人おり、岩岭（古公坑、花樹背、鄧家坑）には紙槽が4戸、従事者が36人おり、豊山（福村）には紙槽が1戸（1930年に生産停止）、従事者が9人いた。また、土紙の生産量は、1918年に4万担、1927年に4.43万担、1932年に3.48万担、1936年に3万担、1941年に1.5万担、1945年に6.6万担（紙槽は300戸余り）、1947年に1.2万担となった。そして、1948年になると、製紙業に対して政府から20億元の貸付けが実施され、1949年には紙槽が371戸、従事者が2,016人、生産額が5万担余りにまで増加した⁽⁴¹⁾。

石城県塘塍鎮は、山勝ちで竹を多く生産し、ソビエト区になる前は、300~400戸が年間約3,000担の土

紙を生産していた⁽⁴²⁾。

一方、1930年代になってもほとんどソビエト区にはならなかった大庾県（現大余県）は、山勝ちで、140~150戸の農家が手工業に従事し、年間約2万担の竹紙を生産していた⁽⁴³⁾。1920年代末の調査によれば、大庾県では毛辺紙が河洞沙村などで生産されて贛州・南昌などに販売され、削穀紙や高方紙が大庾や左拔横江などで生産されて南雄や広東省などに販売された⁽⁴⁴⁾。

崇義県の土紙業は、清朝道光元年（1821年）にはすでに相当な規模になっており、1936年に崇義県の「紙棚」は277個、生産量は21,500担に達し、土紙の主要なものに東庄紙（磨頭）・南扣紙（扛鎌）・重紙（玉扣）・元書紙・大表紙などがあり、最高年産量が6万担余りに達した⁽⁴⁵⁾。

崇義県の土紙は、東庄紙（磨頭紙）と呼ばれ、道光元年（1821年）には最盛期を迎え、700余りの「紙棚」があり、土紙の大部分は広州に販売され、さらに香港・マカオ・東南アジアへ転売された⁽⁴⁶⁾。

中央ソビエト区の周辺地域に位置していた崇義県第4区は、竹紙・杉木・石灰を生産することで生活していたが、1931~32年に紅軍の騷擾に遭い、農地は荒れ、それらの生産量が激減した⁽⁴⁷⁾。

V. おわりに

江西省は中国の中で土紙の生産が最も盛んだったが、第一次国共内戦時期には主戦場となったために大きな打撃を受けた。江西省においても土紙の生産地は、おもに山間部であり、1931年には江西省瑞金に中華ソビエト共和国臨時政府の首都が置かれ、中国共産党軍の支配地域が拡大したために、中国国民党軍の激しい攻撃の的となった。江西省の土紙生産は、近代において洋紙の流入によって駆逐され、1931年以降の世界経済恐慌が波及して衰退したという経済的な事情よりも、むしろ第一次国共内戦による農村の直接的破壊という政治的な事情によって衰退したと見るべきである。このことは、戦争ないし政治的混乱が経済の発展と両立しないことを示している。

また、江西省の土紙の移出は1931年以降激減したが、紙の移入は1932年からほぼ途絶した。このような状況も、洋紙の流入によって土紙が駆逐されたという説明では不十分であることを示している。

1937年に日中全面戦争が勃発すると、日本側の経済封鎖もあって、皮肉なことに、洋紙の流入は滞り、紙不足によって紙の価格が上昇すると、土紙に対する需要も高まり、江西省内の各地でも土紙の生産が

復興していった。

注

- (1) 詳細については、拙稿「近代中国における手工製紙業の展開」(鹿児島国際大学附置地域総合研究所『地域総合研究』第35巻第1号, 2007年9月)・同「近代浙江省における手工製紙業の展開」(金沢大学環日本海地域環境研究センター『日本海地域研究』第39号, 2008年2月)を参照していただきたい。
- (2) 陳榮華・余伯流・鄒耕生・施由民等著『江西経済史』(江西人民出版社, 2004年)533頁。ただし、典拠は「江西紙業状況」(『江西建設匯刊』1930年1月)である。
- (3) 同上書『江西経済史』533頁。
- (4) 東亜同文会『支那省別全誌』(第11巻. 江西省, 1918年)662~664頁。
- (5) 前掲書『江西経済史』535頁。なお、原典は、温銳等『百年巨変与振興之夢』(江西人民出版社, 2000年)93頁。
- (6) 浙江省政府設計会編『浙江之紙業』(1930年)30~36頁。
- (7) 滕振坤「鉛山連史紙」(中国人民政治協商会議江西省鉛山県委員会文史資料研究委員会『鉛山文史資料』第3輯, 1989年10月)56頁。
- (8) 中支建設資料整備委員会(上海・興亜院華中連絡部内)『江西省經濟事情』編訳彙報第59編(1941年)14~18頁。ただし、原典は江西省政府經濟委員会『江西經濟問題』江西省政府經濟委員会彙刊第1集(1934年)である。
- (9) 江西省政府建設庁編『紙』(1939年)28~30頁。なお、日用紙とは廁紙(トイレット・ペーパー)・引火紙(火つけ用紙)・壁紙などのことである(前掲、拙稿「近代中国における手工製紙業の展開」41~42頁を参照していただきたい)。
- (10) 霍鏡清「浙贛鐵路玉南段經濟調查」(『經濟旬刊』第4巻第18期, 1935年6月25日, 調査)3頁。
- (11) 滕振坤「鉛山連史紙」(中国人民政治協商会議江西省鉛山県委員会文史資料研究委員会『鉛山文史資料』第3輯, 1989年10月)57~58頁・64~65頁。
- (12) 鉛山県志編纂委員会『鉛山県志』(南海出版公司, 1990年)214~215頁。
- (13) 史徳寛「調査江西紙業報告書」(『經濟旬刊』第5巻第5・6期合刊, 1935年8月25日)2頁。
- (14) 東亜同文会『支那省別全誌』(第11巻. 江西省, 1918年)694頁。
- (15) 東亜同文会『支那省別全誌』(第11巻. 江西省, 1918年)685~686頁。
- (16) 「浙贛鐵路玉南段沿線之經濟概況」(『浙江建設月刊』第8巻第12期, 1935年6月, 専載)4頁。
- (17) 「浙贛鐵路玉南段沿線之經濟概況」(『浙江建設月刊』第8巻第12期, 1935年6月, 専載)6~7頁。
- (18) 「貴溪県文坊京表紙業概況」(『經濟旬刊』第7巻第11・12期, 1936年10月, 調査)75頁。
- (19) 阮春霖「広豊農村經濟概況」(『經濟旬刊』第2巻第8・9期, 1934年6月25日, 農村通訊)37頁。
- (20) 丁思銘「万年県農村經濟之今昔観」(『經濟旬刊』第4巻第16期, 1935年6月5日, 通訊)1~2頁。丁思銘「万年県第五区農村現況」(『經濟旬刊』第4巻第17期, 1935年6月5日, 通訊)1~2頁。
- (21) 「各県經濟概況調査」(『經濟旬刊』第2巻第6期, 1934年2月21日, 調査)3頁。
- (22) 江西省万載県志編纂委員会編纂『万載県志』(江西人民出版社, 1988年)306~326頁。
- (23) 凌雲漢「麻田造紙業盛衰概況」(芦溪区政協文史委員会編『江西省萍郷市芦溪文史資料(工商史料特輯)』第4輯, 1990年12月)54頁。
- (24) 凌雲漢「麻田造紙業盛衰概況」(芦溪区政協文史委員会編『江西省萍郷市芦溪文史資料(工商史料特輯)』第4輯, 1990年12月)55頁。
- (25) 黄錫華口述・甘勛優整理「宣表紙与“黄万全”的興衰」(芦溪区政協文史委員会編『江西省萍郷市芦溪文史資料(工商史料特輯)』第4輯, 1990年12月)67~68頁。
- (26) 宜春市地方誌編纂委員会『宜春市志』(海南出版公司, 1990年)325頁。
- (27) 袁伯浦「宜春県第八区社会經濟概況」(『經濟旬刊』第3巻第11期, 1934年10月15日, 通訊)3頁。袁伯浦「宜春県城二十二年商業概況」(『經濟旬刊』第2巻第14期, 1934年5月15日, 農村通訊)15頁。
- (28) 銅鼓県志編纂委員会『銅鼓県志』(南海出版公司, 1989年)370頁。
- (29) 楊樹徳「奉新県經濟情况」(『經濟旬刊』第5巻第5・6期合刊, 1935年8月15日, 通訊)1頁。
- (30) 安福県志編纂委員会編『安福県志』(中共中央党校出版社, 1995年)523~524頁。
- (31) 史徳寛「黎川樟村製紙之調査」(『經濟旬刊』第4巻第9期, 1935年3月25日, 調査)5頁。史徳寛「調査江西紙業報告書」(『經濟旬刊』第5巻第5・6期合刊, 1935年8月25日)8頁。
- (32) 史徳寛「調査江西紙業報告書」(『經濟旬刊』第5巻第5・6期合刊, 1935年8月25日)12頁。
- (33) 東亜同文会『支那省別全誌』(第11巻. 江西省, 1918年)685~686頁。
- (34) 「各県經濟概況調査」(『經濟旬刊』第2巻第6期, 1934年2月21日, 調査)1頁。東北大学豫鄂皖贛収復匪区経

- 濟考察團編『東北大学豫鄂皖贛收復匪区經濟考察團報告書』(東北大学図書館, 1934年) 55~56頁.
- (35) 楊竹生「崇仁第六区農村經濟概況」(『經濟旬刊』第4卷第18期, 1935年6月25日, 通訊) 1~2頁.
- (36) 「各県經濟概況調査」(『經濟旬刊』第2卷第6期, 1934年2月21日, 調査) 2~3頁. 東北大学豫鄂皖贛收復匪区經濟考察團編『東北大学豫鄂皖贛收復匪区經濟考察團報告書』(東北大学図書館, 1934年) 57~58頁.
- (37) 熊憲章「宜豐農村經濟之衰落」(『經濟旬刊』第2卷第13期, 1934年5月5日, 農村通訊) 21頁. 熊憲章「宜豐農村經濟狀況」(『經濟旬刊』第4卷第13期, 1935年5月5日, 通訊) 1頁.
- (38) 詹傳輝「樂安縣經濟概況」(『經濟旬刊』第4卷第10期, 1935年4月5日, 通訊) 1~2頁.
- (39) 孫頌楠「湯溪大小源一帶之紙業」(『浙江省建設月刊』第9卷第8期, 1936年2月, 調査) 10~12頁.
- (40) 東亜同文会『支那省別全誌』(第11卷. 江西省, 1918年) 689~690頁.
- (41) 江西省石城縣志編纂委員會編纂『石城縣志』(書目文獻出版社, 1990年) 257頁.
- (42) 黃仲經「石城縣第二区經濟概況」(『經濟旬刊』第7卷第18期, 1936年12月25日, 通訊) 41頁.
- (43) 劉大千「大庾社會經濟之現狀談」(『經濟旬刊』第2卷第14期, 1934年5月15日, 農村通訊) 16頁.
- (44) 「江西大庾縣物產狀況及行銷情形調查表」(『工商半月刊』第1卷第18期, 1929年9月15日, 調査) 74~75頁.
- (45) 「崇義縣名優土特產品介紹」(中國人民政治協商會議崇義縣委員會文史資料研究委員會編『崇義文史資料』第2輯, 1990年4月) 95頁.
- (46) 江西省崇義縣編史修志委員會編『崇義縣志』(湖南人民出版社, 1989年) 302~303頁.
- (47) 何遠程「崇義縣第四区農村經濟概況」(『經濟旬刊』第3卷第13期, 1934年11月5日, 通訊) 1頁.